

沙織

侍姫秘録

さむらいひめひろく

小説 筑摩十幸

挿絵 Amane



第一章 男装の麗剣士

第二章 仮面の妖術師

第三章 牝豹たちの去勢遊戯

第四章 処女華・極太貫通儀式

第五章 転姦遊女と犬

第六章 媚牝誕生

006

043

062

098

148

189

登場人物紹介

Characters



よしおか いおり
吉岡 伊織

豊予国を治める吉岡家の嫡男。剣の腕を活かして市井の平和を守るために尽力する、凛々しい若侍。



けごん
華厳 あさひ

若くして遊郭を取り仕切る華厳家の娘。蛊惑的な色気と狡猾な知性をあわせ持つ。



けごん くまかた
華厳 熊方

吉岡家の家臣である荒々しい大男。豊予国と蘭国との交易を取り仕切っている。あさひの父。

よしおか そうろう
吉岡 宋雲

かつて猛将と謳われた吉岡家の当主で、伊織の父。現在は胸を病み、床に伏せている。

かきざき とうじろう
柿崎 藤治郎

伊織が率いる自警組織「鶴翼隊」の副隊長。伊織の頼れる右腕。

あまぎ しどう
天城 獅堂

華厳家に仕える占術師。仮面で顔を隠している。

シノ

吉岡家お付きの妖術師。童女の姿をしているが年齢は不詳。

「わあ。かわいい」

「これはとてもよくできていますわね。とても術でできたモノには見えません。でもまだまだ子供ってところですワ」

百合とマリーも若々しい男根を見た途端、瞳をキラキラと輝かせて覗き込んできた。まるで獲物を狙う肉食獣といった熱視線で、仮性包茎状態の肉棒が熱くなってしまふ。

「精を一滴残らず搾り取れば、術も解けちゃうんでしょ。フフフ。全部お見通しなのよ」

ツンと高い鼻をさらに高くして、勝ち誇ったように嗤うあさひ。どうしてそこまで知られてしまっているのだろうか。そんな沙織の思考を読んだのか……。

「うちも妖術師を雇ったのよ。あなたも会ったでしょ、獅堂って男。この罠を考えたのも、あなたのところのシノを留守にさせたのも彼なのよ。あの小娘も今頃……ウフフ」

「くう……天城……獅堂か……」

兄の仇の名を憎々しげに呼ぶ。兄妹揃って奴の手に堕ちるとは、なんとという皮肉な運命、なんとという屈辱だろうか。自分の軽率さが呪わしかった。

「だが……それがしは負けぬ！ 絶対に負けるものか！ 必ずお前たちの悪巧みを挫き、成敗してくれるっ」

硬い決意を込めた瞳で、宿敵の令嬢を睨みつけた。しかしあさひも動じない。

「私、女のクセに男勝りに粹がるのって好きじゃないのよね。女には女のよさがあるのにそれに気づかないばかりか消してしまうなんて……なんて愚かなのかしら」

ヤレヤレと掌を仰向けて呆れた表情を浮かべる。女の武器を駆使して権力の中核に食い

込む活躍を見せているだけに、その言葉には妙な説得力があった。

「あなたにもいずれわからせてあげる。本当の女の悦びをね。百合、やっちゃいなさい」
命令を受けた黒髪少女が、ウキウキした様子であさひと位置を入れ替える。

「それではお兄上……いえ、姉上でしょう？ えと……とにかく失礼します」

フタナリ状態の沙織に戸惑いながらも、ウキウキと手を伸ばしてくる。少女たちの好奇の視線を浴びせられ、肉棒は僅かに膨らみ始めていた。

「やめろっ！ それに触るなど……んくうっ！」

小さな手に握られてしまった瞬間、ビリリッと赤い稲妻が股間に落雷する。やはり感度は恐ろしいほど高く、シノに味わわれた激烈な射精快感が頭を過ぎった。

「触った感じは本物と同じですね。百合は皮を被ってるのも大好きなんですよ。ドングリみたいでカワイイじゃないですか」
「うう……うるさいっ」

馬鹿にされているのか、褒められているのか。激しい屈辱に沙織は唇を噛む。だが心は汚辱にまみれても、肉棒は勝手に反応を始めてしまう。

少女の掌の柔らかさと温もりを染み込まされた海綿体が、ジワツと熱を孕み硬度を増す。感じてはいけないと思えば思うほど、神経は敏感にささくれてしまう。そこを優しく撫で上げられるたび、牝の快感が熱波のように陰茎の根元をジリジリと焙り、子宮に流れ込んでいく。

(うう……この感じ……まずい……)

シノに悪戯されたときのことが思い出され、沙織は危機感を募らせた。魂に直結するような快美と、その後に訪れる射精という恥ずかしすぎる結末。あんな目に遭うのは二度とご免だったが……。

「あれ、もう大きくなってきました。兄上って、結構感じやすいんですね」

「や、やめろ。か、感じてなんかかない。ああ……触るな……擦るな……うううっ」

「うそばかり。こんなに大きくしていらっしやるのに」

キュッキュツと絡めた手指を動かして、快美感を送り込んでくる。見た目と裏腹に遊女としての技術は一流で、痺れるような快美に沙織は「うああっ」と喘いで背筋をしならせた。男根も見ろ間に勃起させられて、包皮をピンと突っ張らせてしまった。

「んふふっ。もうピンピンですね。ご立派ですよ、兄上のオチンチン。さすが何年も男のフリをしてきただけのことはありますね」

丁寧に皮肉っぽい口調でペロリと唇を舐めた後、百合が顔を股間に近づけてくる。少女の吐息が股間にそよぎ、沙織の太腿はサツと鳥肌立つ。

「や、やめろっ！ 何をする気だ！」

「何って、お口でオチンチンを舐め舐めするんですよ」

「く、口で……っ!？」

そのような性戯の存在も知らない沙織は、頭をはね上げて混乱の視線を百合に向ける。しかし少女娼婦は当然ですと言わんばかりに、ニッコリ微笑み返してきた。

『ふえらちお』も知らないとは随分初な若様ですね。ンフフ、それでは百合の唇と舌の

「気持ちよさをたっぷりと教えてあげます」

蕾のように可憐な唇が綻び、中から花びらのような舌が突き出される。唾液をトロリと乗せた舌先が、淫らな想像を掻き立てながら勃起へ近づいてきた。

「はあ……やめろ……ああ……やめ……っ！ くっううっ！」

最初の口づけは裏筋だった。皮かぶりの亀頭を揉み包みながらペニスを反り返らせ、尿道に沿ってチュツチュツと口づけを繰り返す。

「んちゅっ……くちゅっ……ちゅぶっ……ほらほら百合の唇……んくちゅば……気持ちいいですか、兄上？ ねろっ……れろっ くちゅんっ」

「あひいっ！ よせ、口でそんなところっ！ 汚い……うあああっ」

「汚くなんてないですよ。上でも下でもオチンポをくわえ込むときが女が一番幸せなんです。それにこの匂いや味がお口いっぱいにはじけると、頭がポウツとなるほど気持ちいいですよ。沙織様も女の心を取り戻せば、きつとわかると思います。それに沙織様はされる側の気持ちもおわかりになるから、きつといい遊女になれますよ」

百合はニツと微笑むと同時に手に力を込め、勃起を一気に根元までくわえ込んだ。まるで水飴をしやぶるような無邪気さで舌を躍らせ、チュパチュパと唾液を啜りながら、ふっくら柔らかな頬をくぼませる。

「ああうっ！ そ、そんなこと……ああっ！ わかりたくないっ……誰が女になんか……んあああ……ひっ……や、やめろおっ！ あああっ!!」

肉棒に奉仕される快感を教え込まれ、沙織はビクビクと爪先を反り返らせる。なんとい

う快感だろうか。シノに弄られたのがまるで児童に等しいと思えるほどの、圧倒的な快楽の津波だった。

(こ、こんな……小さな娘が……すごい……)

少女のぬめつく温かい粘膜に包まれているだけで、背骨まで溶けそうな恍惚感に襲われた。カアツと臍の裏が熱くなり、爪先がジンジンと甘い痺れに包まれる。これほどの快感がこの世にあったのかと、俄には信じられない。

恥ずかしい男性器官が自分よりも年下の美少女の口に呑み込まれ、彼女の意のままに勃起させられ弄ばれていると思うと、屈辱感と背徳感が胸を締めつけ、それが羞恥を何倍にも増幅させてくる。

「はあう……やめろ……兄などと呼ぶな……」

「いいじゃないですか。百合のことを妹だと思えば、もつと気持ちいいでしょ？」

小首を傾げてニッコリ微笑む黒髪の少女。愛らしい仕草は確かに妹という雰囲気だ。

「く、口を離せ……ああつ、妹だなんて……兄妹がこんなふしだらなこと……するわけ……ううんっ」

性の知識が乏しい沙織にとつて、性器を口で愛するなど常識外のことだ。性交は愛する者同士の神聖な行為であり、浅ましく快楽を貪るなど、ふしだらで淫ら極まりない背徳行為であった。ましてや兄妹にするなど言語道断の近親相姦だ。それなのに今、百合から奉仕されて身体は金縛りにあったように動かせなくなる。少しでも気を抜けばその妖しい快感に押し流されてしまいそうで、沙織は必死になつて理性の手綱を引き続けた。

「そのふしだらなことされて悦んでいるのは、どこのどなたかしら？」

「く……ぶ、無礼者っ！ それがしは悦んでなど……いないっ！」

強く否定するものの、心の動揺を映してか声は僅かに上擦っている。

「フフン。男っぽくイキがっちゃって。オチンポおっ立ててよく言うわ」

さらに沙織を追い込もうとあさひとマリーも両側から援護の愛撫を仕掛けてきた。

「抗つても無駄よ。あなたはそういう運命なのよ。それにその変態みたいなことをあなたもいざれ悦んでするようになるわ。そういう女になるのよ」

「私が男を悦ばせる舌の使い方、教えて差し上げますワ」

蛇のように舌をちろりと出し、マリーの碧眼が獲物を狙って細められる。歌舞伎の女形のような美しい少年剣士を蹂躪することに倒錯した昂奮を感じているようだ。

沙織の顎をつかむ力は意外なほど強く、迫ってくる唇をかかわすことができない。

「んぐっ……むっっ！」

有無を言わせぬ素早さで、沙織の唇は奪われていた。

（そんな……初めての……口づけを……）

男の格好をしていても、やはり年頃の女の子。接吻という行為には純粹な憧れを抱いていた。それをこんな形で、しかも異国の女に奪われて、胸の奥が引き裂かれるように痛んだ。懊悩する脳裏になぜか兄の面影が浮かび、目尻に涙がうつすらと滲む。

「口づけは遊女の基本中の基本よ。もっと口を開いて、情熱的に舌を絡め合うの。マリーの舌の動きをよく覚えるのよ」

耳たぶに舌を這わせながらあさひが指導してくる。そんな言葉に従うつもりはないのだが、百合の唇に急所をシュボシュボと扱かれては顎に力を入れ続けることもできない。「んっ……つく……こんな……あ、ああ……いやだ……やめ……ろ……んちゅっ」

緩んだ唇をこじ開けられ、マリーの唇が侵入する。長くしなやかな舌は驚くほど長く、蛇のようなしたたかさで、沙織の舌を絡め取った。濡れた粘膜を摺り合わされて、嫌悪感がうなじをゾクゾクと粟立てる。

「んフウ、沙織様の唇……とつても柔らかくて、甘くて、いい匂いですワ」

マリーのいやらしく巧みな舌技が沙織を翻弄する。チロチロとくすぐるように蠢くやり方は、確かに百合の舌使いと似ている気がする。それが口淫奉仕の快感を一層鮮明に、沙織の肉棒に刻み込んでくる。ピチャピチャと響くいやらしい水音にも、肉棒への舌使いを想像させられてしまう。

（ああ……どうして……こんなことされて……変な気持ちに……）

僅かに頭をのぞかせた亀頭の性感帯を集中的に責められ、腰がモジモジと揺れてしまう。狼狽しているうちに舌を引き抜くように強く吸われたかと思うと、大量の唾液がドロリと送り込まれてくる。吐き出すことも叶わず、沙織はそれを飲み下すしかなかった。

「んぐ……むちゅ……ごくっ……ぷはああ……ひやめ……ああ……ごくごくんっ……むうんっ！　もう……やめろお……」

上顎の裏をくすぐられると脳幹にまで電気が走り、ここがどこで、何をされているのかもわからなくなってくる。甘美な拷問に意識は蕩かされ、次第に身体に力が入らなくなっ

てきた。その一方で勃起は、美少女遊女の口の中ですます大きく勃起させられていく。ツーンツーンと神経に沿って走る快樂の戦慄が、女の中心である子宮を疼かせ、処女の秘粘膜をジワジワと潤わせていく。

大きく捻げられた股間が、恥骨を持ち上げるようにヒョコヒョコと動き、サラシの間から搾り出された小振りな乳房の上で、桃色の乳頭がツンと尖っていく。

まだ凛々しい美少年剣士の面影が濃く残っているため、その男女の性を超越したような神秘的な色気は、遊女たちを昂奮させる。

「ソフフウ、どっちも濡れてきました。兄上は接吻にも感じるんですね。それでは、こっちにも接吻してあげます」

百合が陰茎を握り締める掌にギュッと力を込めると、包皮が剥き返り、新鮮な色みの亀頭がクルツと露出させられた。唾液に濡れてツヤツヤ光る先端に、尖った唇がチュウツと吸いついた。

「あひいっ！　そ、そこはやめろおおっ！　ああああああつ！」

敏感すぎる粘膜を責め立てられ、絶叫が迸る。脳裏に赤い火花がパチパチ散る。

チュツ……チュツ……チュパツ……チュウツ！

断続的な吸飲で、先走りの露を啜り飲んでいく百合。まるで花の蜜を吸う蝶のように可憐な仕草だが、吸い取られる沙織には、気が遠くなるような快樂責めだった。爪先がピクピクと痙攣し、臍が裏返るほど腰が反ってしまふ。

「気持ちいいでしょう、沙織様。この快感をよおおく覚えて、今度は女として殿方にして

差し上げるんですよ」

「んあああああつ！　そ、そんな……っ！　覚えてくはない……んむう……そこお……先っぽ……あああん……す、吸うなあ……うああむうん！」

敏感な亀頭部を責められる激感に加えて、尿道の中を真空にされるような陰圧が、射精欲求を爆発的に高める。はち切れんばかりの欲情が勃起の中に充満して、今にも爆ぜてしまいそう。

「沙織様の唾、甘くておいしいですワ。さあ、私の唾も飲むのです」

「んぐう……く……こくっ……こくっ……こくっ……むああ……ハアハア……んん」

もはや逆らうこともできず、大量に注ぎ込まれる唾液を飲み干してしまう沙織。そんな従順な姿に氣をよくしたのか、マリーは沙織の舌を唇で軽くくわえ、まるで奉仕するかのように頭を前後に動かし始める。その合間にも尖った爪で尖った乳首をコリコリと引っ掻いてもくる。

「んああ……あつ……ひいああう……胸だめ……んっんっ！」

しゅぽつ！　じゅぽつ！　ぐちゆるっ！　じゅぽ、じゅぽおっ！

百合とマリーの呼吸はびつたりで、二人がかりの技巧の前には、初な沙織が太刀打ちでききるはずもない。ビリビリと舌から流れた快美電流がペニスの先端に走り抜け、堪え難い快樂の炎に灼かれる裸身が背筋を弓なりに反らせていく。

（ああ……身体が熱い……アレが……熱くなつて……あれが……くるっ！）

目の前が真っ赤に燃えていた。マリーに蹂躪される口腔から響く唾液の水音と、百合に



しゃぶり尽くされるペニスから漏れてくる吸着音とが共鳴し、まるで身体が一本の肉棒と化してしまったような錯覚に襲われる。必死に逃れようとしながらも、心のどこかに甘美で破滅的な快感を待ち望んでいる自分がいる。

「ウフフ。そろそろ限界みたいね。さあ、射精しなさい。みつともなく、臭い子種汁を吐き出して生き恥を晒しなさい」

「はああう……いひやだ……射精なんて……し、したくない……ンああ……だ、出したくない……絶対、はう……射精なんてしないっ！ あむう……くちゅうる……ンン！」

汗まみれの美貌を苦悶に引きつらせながら最後の抵抗を試みる沙織。拘束された両手が、縄を引きちぎらばかりに強張り、白足袋の爪先が反り返る。身悶えるたび、打ち振る束髪が何度も激しく床を叩いた。

「我慢しても無駄です、兄上。んふつ。さあ、熱くて濃いので、百合に飲ませてください」
「ああ……の、飲むって……ああ……まさかアレを……」

「もちろん精液を飲むんですよ。兄上の精液を……んちゅぱ……百合のお口にたくさん出してください……んちゅ、むふんっ！ 一滴残さず全部飲んで差し上げますから」

「そ、そんなぁ……そんなのダメえっ！」

沙織にとつて信じられない事態の連続だった。精液を口で飲み干すなんて、不潔な変態行為が許されるはずがない。

「はああ……ダメ、ダメ……絶対、ダメだ……飲むな……うう、きたない……ああ……」
まるで犯罪の片棒を担がされるように沙織は震え上がる。そんなはしたない快楽に溺れ

「んぐう……はああ……はああ……くやヒい……あ、あむう……んんっ」

桃色に霞む脳裏に精を搾り取られたときのことが浮かび上がる。先っぽや傘の裏側を舐められると、腰が震えるほど気持ちよかった。その快感を思い出すと今は男根を失った恥丘が切なく疼き、子宮にまで切なさを擦り込んでくる。得体の知れない昂奮に襲われ、思わず正座の太腿を搾り合わせてしまう沙織姫だ。

（ああ……あの……感じ……私の……オチンチンの……）

二度と味わえぬ牡の快感を反芻するように、桃色の舌が下から上へ何度も往復し、勃起に唾液を塗り込んでいく。いつしか熱を帯びた吐息が吐きかけられるたび、剛毛がそよいで巨根も嬉しそうに硬度を増していく。

（この先っぽを舐められたら、頭が痺れて……）

思い出しながら舌を鈴口に這わせる。淫らなトロミを味わいながら唾液をたっぷりまぶしていくと、熊方が「ううむ」と快感の唸り声を漏らす。

（この傘みたいなところが……すぐ感じて……何度も何度も射精をさせられて……）

赤みを増した唇を被せて逞しい亀頭をキュッキュッと扱くように頭を振ると、魂が吹き飛ぶような射精絶頂の体験が、先ほどのことのように脳内で再現される。あの快感をもう二度と味わえないと思うと、一抹の寂寥感、喪失感を感じて下腹がジーンと疼いた。

「おお、いいぞ……初めてにしては上出来だ。さすがあさひが仕込んだだけのことはある」

快感に肉棒がヒクつき、お返しとばかり濃厚な先走り汁を美貌の剣士の唇に吐き出した。汚辱のネバネバが舌に絡みつき、味蕾を麻痺させる。溢れ出す唾液がほっそりした

顎を伝い落ちて、白い喉を流れていく。

「だいぶオチンポをしゃぶるのに抵抗がなくなってきたわね。ほら、お露も全部飲むのよ」
「う、うう……んくちゅ……ちゅぶ……んっ、んっ、んんふう……っ」

コクリコクリと喉が上下し、牡の体液を飲み下していく。それには当然男の精気がたっぷり含まれており、染み込まされる胸の奥がカアツと熱くなる。

「ほほう、また乳が大きくなってきたな。ふふふ、お前の母親を思い出すわい」

熊手のような掌が、沙織の乳房をガツシリ握りつぶすように愛撫する。僅かな間に女性の性を取り戻した乳房は、まだ小振りながらも美しい稜線を描いている。きめ細かく滑らかな肌は女らしさを取り戻し、乳頭も痛いほど膨らんで乙女の胸であることを自己主張していた。しかもさらに大きくなる気配があるのだから、熊方が喜ばないはずがない。

「お尻も大きくなってきたわ。ウフフ、ムチムチしていやらしいお尻。これでもまだ自分が伊織だなんて言い張るつもり？」

「んふう……やめろ……それがしは……あああむ、くちゅ……伊織だ……」

口を男根に犯されては反論も力がない。あさひに責められ続ける尻タブも見事なまでに開発されていた。緩やかな二つの曲線やむっちり柔らかそうな肉づきは男にはそぐわない優美さを復元している。量感を増した尻回りのせいで、腰のくびれがハッキリ目立つようになった。成長中の皮下脂肪の層は太腿のほうにまで伸びており、さらに沙織の身体を女へと変質させていくだろう。

肛門もすっかりほぐされて淫具の動きを滑らかに受け入れている。捲り返される直腸粘

膜に走る快美が伝わったのか、その奥に垣間見える媚肉も溢れんばかりの潤いを湛えているようだ。ピクピク震える括約筋は張り型をもっと深く呑み込もうとしているかのようにも見える。

「グフフ。逆らっても無駄だ。もっと美しくもつと淫らな女に変えてやるぞ」

万力のような腕で沙織の頭を両側からガツシリ固定し、熊方は猛然と腰を振り始めた。

ジュボツ！ グジュツ！ ジュボオツ！ ズブズブズブウツ！

「あぐ……つ……んぐつ……くむう……んじゅばあつ……ああうん」

顎が外れそうな勢いで、巨大な肉杭が連続で打ち込まれる。延髄まで撃ち抜かれてしまいうような衝撃に、沙織は目を白黒させ、屈辱の涙を滲ませた。何度もえげげそうになりながらも、逃れることもできず、されるがままに蹂躪されていく。

「ほらあ、こつちも感じなさい」

あさひもここぞとばかり追い込みに入った。ズブズブと張り型を抜き差しし、身体の奥底にまでフタナリ張り型の味を刻み込んでいく。

「んあああああつ！ お、おひり……んむぐう……やめえ……あああつ！」

鶴翼隊の隊長として正義のために闘ってきた自分が、極太の男根を頬張らされ、排泄口を抉られ、武士の誇りも人間の尊厳すらも根こそぎ奪われる。そんな惨めさが心を墮落させ、あさひに去勢されてしまったときの喪失感と絶頂感を甘ったるい腐敗臭とともに、爛れた脳内に蘇らせるのだ。すると石抱き拷問の痛みも不思議と和らいでくる。

（ああ……お口も……お尻も……オチンチン入れられて……どうしてこんな気持ちに？）

同時に貫かれる粘膜が互いに被虐の快樂の波をぶつけ合う。その交差点の子宮が燃えるように熱くなり、秘奥の粘膜にジワツと蜜を湧かせてしまう。

「色っぽい顔になってきたぞ。グフフフ、あの勇ましい若殿様と同じ人物とはおもえんな」
節くれたごつい五指が乳肉にずぶりと食い込む。荒々しい玩弄に沙織は顔を歪めるが、同時に突き刺さる乳悦に「ああん」と女のような声を搾り取られてしまうのだ。

（こ、こんなに胸が……感じるなんて……）

豊かな膨らみを取り戻しつつある乳房はこれまでと較べものにならないほど感じやすくなっていた。乳頭を擦り上げられるたび数千本の快美の針が心臓に突き刺さる。しかもその快感は身体の奥深く、女を中心である子宮にまで届いて、沙織の中の女を目覚めさせようとする。

「女の気持ちよさがわかってきたかしら？」

白蛇のしなやかさで伸びたあさひの手指が、沙織の聖域に忍び込む。陰毛を剃り落とされ、童女のようにされてしまったワレメに侵入を阻むものはない。

「アハハッ。やっぱり濡れてるじゃない。口先で何を言っても、身体は女の悦びを求めているのよ。ホラホラア！」

愛蜜を確かめた指がさらに掻き混ぜられ、クチュクチュと湿った音を響かせた。

「う、ううう……っ……ちがう……んむう……ちが……むうん」

男根をくわえたままの沙織が小刻みに首を横に振るが、淫靡な調べは耳から離れてくれない。

「ここで女の子はすつごく感じるのよ。なくなったオチンポが恋しくなったらここを弄るといいわ」

さらにワレメに埋もれた鋭敏な肉芽を掘り起こされ、新たな快美が腰椎に突き刺さる。
「んむっ……ああ……そ、そこ……んくうっ」

自慰すら知らぬうちに男としての生き方を強要された沙織にとって、初めて知る悦楽だった。クリッククリックと指先で転がされるたび、電気の鞭に打たれたように背中が反り、子宮がキュウンツと痛いほど疼く。なまじ男根の感覚と似ているせいで、喪失の切なさと同様に頬張らされた勃辱がより直接的に子宮に響いてくる感じだ。その切なさをぶつけるように頬張らされた勃起をチュパチュパと吸い立ててれば、妖しい気持ち湧き起こってくる。

（うああ……また……お腹に……）

乳房もお尻も淫核も、ありとあらゆる快感神経が子宮へと直結しているようだった。そして燃え上がる子宮の反応がすぐさま身体全体に跳ね返って、髪先から爪先まで熱っぽく発情させられていく。女の身体にとっていかに子宮が大切で重要なところなのか、改めて思い知る。

「これを見なさい」

さらにあさひは濡れた指先を目の前に突きつけてきた。中指と人差し指が淫らな粘液に包まれ、二本の間には蜜糸が橋を架けている。

「ハアハア……ああ……うう……いやっ！」

女としての快感を感じている証拠を見せつけられ、自分の身体はもうすっかり淫らな女

へと変えられてしまったのだという諦念が頭を掠めもする。

(でも……まだだ……まだ、負けてはダメだ……お兄様の仇を討つためにも……)

たとえ肉体は貶められても精神力こそが今の沙織に残された最後の柱であり、それを支えているのが兄への強い思いであった。ブルブルと頭を振って弱気を追い出し、額越しの視線で熊方を睨みつけた。

「ぬう、まだそんな顔ができるとはたいしたものだ。さすが吉岡家の嫡男を名乗るだけのことはあるわい」

その精神の潔癖さに百戦錬磨の猛将も舌を巻く思いだ。これほどの女は今まで見たことがなく、煌めく眼光に思わず怯んでしまうほど。

「フン。いつまでその強気が続くか、楽しみだわ」

娘のほうが強気で、怒りを込めた手が肛門責めの張り型に呪力を注ぎ込む。

ヴィヴィヴィヴィヴィン！　ヴィヴィヴィヴィヴィン！

「ンあああああつ!! あひいいいんつ!!」

羽虫のような音とともに激しい振動が肛門に送り込まれる。かつての分身は淫らな改造を受け、元の主人を責め立てる凶悪な淫具と化していたのだ。もともと沙織の気を練り上げて作られたモノだけに、そこから放たれる精気は肉体に馴染みやすく、強さは熊方のモノに勝るとも劣らない。子宮に近いぶん、沙織の中の女を目覚めさせようとする力も強烈だ。

「あ、ああああつ！　んおお、おヒりが……あああおとおおおつ！」

腸管を震わせ子宮にまで届く振動に、姫侍は艶のある黒髪を振り乱して絶叫した。これまでよりも一層明確に女の部分を刺激され、揺り起こされようとしている。温もりまで感じるほど生々しい張り型の感触もおどましく、本当の男に肛門を犯されているような気持ちになってくる。

(どうして……こんなに……だ、だめ……こ……これ……)

お尻のみならず、下半身全体に拡がる淫靡なさざ波に女の血肉を少しづつ目覚めさせられていく気がした。臀丘はさらにプリプリに張りつめくびれた腰を強調する。滑らかな脂肪が太腿の下の筋肉を悩ましく覆い隠していく。張り型の正体を知らない沙織は、どうしてそこまで反応してしまうのかわからず、自分の身体はおかしくなってしまったのではないかと混乱するばかりだ。

「いい反応だ。もうほとんど女の顔になっているではないか」

気をよくした熊方が獣の勢いで律動を加速させた。イボだらけの胸部が舌を巻き込み、尖った亀頭は食道にまで届いて、沙織は顔を真っ赤にして悶絶した。

(ああ……口が……勝手に……)

少女剣士の中で目覚めた女の性が犠性を求めるのか。これほど苛烈に責められながらも舌は積極的に肉棒に絡みつき、窄めた唇が陰茎を磨いていく。肛門も開いたり閉じたりを繰り返しながら、疑似男根を根元まで呑み込んでしまう。正座の腰もモジモジとくねり、脚の痛みすら快感と混ざり合って沙織を被虐の嵐へ巻き込もうとする。女のモノへと変わっていく乳房や尻が熱く火照り、そこをもつと触りたい、男に見つめられたいという倒

錯した欲求が頭をもたげて侍姫を困惑させた。

「上でも下でもオチンポをくわえてうっとりしちゃって。いやらしい女の子になっちゃったみたいね」

美少年剣士の正義の仮面を剥がされ長大な牡肉棒で淫らな女へと躡けられていく姿は、あさひの眼に儂くも美しく映った。

「んぐ……ちゅぶ……はああ……はああ……そんなこと……んむう……ない……」

否定するものの声は弱々しい。凜々しかった瞳も光を失い、とろけた視線を剛毛に覆われた巨根に向けている。勃起を頬張らされる口元も涎で妖艶に濡れて、淫らな雰囲気が強めていた。

「もうすぐ父上が射精するから全部飲むのよ。一滴もこぼしたらだめよ」

恐ろしい予告を聞かされて、沙織の背中がビクツと震える。確かに口の中で暴れ回る剛棒は、頻繁に脈動を繰り返し暴発寸前の緊張を漲らせている。

（い、いや……あれを……口の中に出されるなんて……っ！）

憎い男の生殖体液を飲まされるなど、死にも勝る屈辱だ。つい昨日まで男として生きてきた記憶がまだ残っているため、全身に悪寒が走るほどおぞましい。

「いひやだ……そんなもの……んっぐう……飲みたく……んちゅ……ない……むうん」
必死に勃起から口を離そうとするのだが、熊方の豪腕に敵うはずもない。儂い抵抗は却って男を悦ばせる結果にしかならなかった。

「吉岡の若様の口に儂の子種を飲ませることができるとは、たまらんわ！」

倒錯した勝利の快感に酔った熊方が嗤う。技巧などほとんどないに等しいが、頬の柔らかさ、舌の温もりなどは持つて生まれた素質だろう。勃起に吸いつくような快感で、ただくわえられているだけでも射精してしまいそうだ。さらに恐怖と屈辱に歪む姫君の表情と復讐を果たせる昂奮が男の劣情を刺激し、溜まりに溜まった情欲の引き金を一気に引いた。「おおっ！ いいぞ、伊織。お前の口の中にたつぶり注ぎ込んでやる。ハアハア……これが儂の子種だ。しっかり味わうのだぞっ！」

ムンズと束髪をつかまれて、逆に根元まで深く突き入れられてしまう。醜い男の腹と密着した美貌は、串刺しの苦しさに白目を剥いている。

「うおおおおっ！ くらええっ！」

ブッシャアアアアアアアアッ！ ドクドクドクッ！ ビュルルルウウツ！！

怒張が激しくいななき、凄まじい勢いで白濁を噴き出す。大量の精液に口腔を埋め尽くされて、生臭い異臭が脳底に突き刺さる。魚のはらわたのような粘りけの強い体液が菌莖に絡みつき、独特の苦味が舌の表面を埋め尽くした。

(いやあああああ~~~~~っ！)

清潔好きな沙織にとつてそれは汚水に等しい不浄の液体だった。普通に生活していれば一生口にもなかつたであろう味で、舌が腐り落ちてしまいそう。生理的な嫌悪感が爆発し、全身の毛穴から冷たい汗が噴き出した。だが巨根に出口を塞がれて吐き出すこともできず、侍姫は必死に喉を動かして嚥下するしかない。

「んぐう……むう……んっ、んっ……むふうんっ！」

「飲め、飲めえっ！ グハハハハッ！ もつと舌を絡めて味わうのだ」

熊方の射精は驚くほど多く、いくら飲んでも後から後から湧き出して来る。重く熱い塊はひどく粘って食道をなかなか降りてくれず、そのぶん長く沙織は汚濁の体液を味わわれることになった。実際には僅かな時間でも、沙織には永遠とも思える時間だった。

「こっちも女にしてやるわ！」

あさひは張り型をズブリと直腸の奥までぶち込んだ。責め具の中に呪力として蓄積されていた沙織自身の精気が、白濁となって肛門内に撃ち込まれる。

「あひいいいんっ！ そんなあ、ンあああつ、おヒリにレてるう……あああああつ!!」

垂直に噴き上がる灼熱線に菊蕾を貫かれ、沙織の背筋が弓なりに反る。腸内に生まれた官能の火柱が脊椎を駆け上がって延髄を直撃した。目の前に真つ赤な陽炎が立ち上がり、何もかもが焼き尽くされていく。

「あ、ああつ……熱い……つ……んむうう……熱いいいっ！ はああううっ！」

思わず吐き出してしまった巨根からは尚も射精が続いており、汚辱の飛沫が顔面にぶちまけられた。ビュッビュッと断続的に吐き出される汚液が、美少女の顔を覆い尽くさんばかりにへばりついていく。猛烈な精臭と熱気が肺腑に忍び込み、身体の内側まで生臭い精液臭を染み込まされてしまう。網膜の裏で無数の星が生まれては粉々に砕け散っていった。

「ああ……あひっ、ああ——ッ!!」

プシヤアアアアアアアッ！

失禁と同時に膣孔が収縮し、熱い潮をドプツと溢れさせる。肛門もキリキリと窄まって

張り型を喰い千切らんばかり。身悶えるたびに脚にギザギザの板が食い込み、痛みと混ざった倒錯の快感が下半身を痺れさせた。

「はひっ、ひいいんっ！」

拷問の苦痛すら被虐の魔悦に変えて、沙織は生まれて初めての肛悦絶頂に呑み込まれていく。足袋の爪先が何度も反り返り、拘束された拳がまっ白になるほどきつく握り締められた。ビリビリと背筋が痺れ、仰け反った美貌が天井を見つめる。

「あ、ああ……ハアハア……うぐぐ……んくっ……ハアハア……」

やがて支えを失った頭がガクンと落ち、重石の上突つ伏す。精液まみれの美貌を紅潮させ、半開きの唇から舌をはみ出させて、ゼエゼエと喘ぐばかりだ。

「途中で吐き出しおつて、けしからん奴だ」

熊方は不満そうに鼻を鳴らしたが、剛棒はまったく衰えを見せず依然として天を衝いて起立している。

「まあ、初めてにしては頑張ったほうでしょう。残りは子壺に注ぎ込んでやれば、沙織姫も女として目覚めるハズ。ククク」

獅堂は薄く嗤った。

「うう……ゲホッゲホッ……はああ……うぐぐ……っ」

石抱きの拷問から解放されても、沙織は身体を起こすこともできなかつた。痛めつけられた両脚のせいもあるが、男の精液を大量に飲まされた挙げ句、肛門で絶頂を極めさせら



「ウフフ。もつと言うのよ」

「ハアハア……沙織はお兄様のことが大好きです……三年間……お兄様の格好をして……鏡を見ながら……フタナリチンポでセンズリしていた……へ、変態でございます……あふん……どうか……お、お兄様のドロドロの濃い子種を……このいやしい元フタナリのマ○コに注ぎ込んで……相姦の子を……種付けしてください……ああんっ！」

言っているうちにそれが本当であるような気がしてきて、異様な昂奮に襲われた沙織はしつかり兄のモノをくわえた腰を淫靡にくねらせた。

「血の繋がった兄の子を欲しがるなんて、なんていやらしい娘だ」

「信じられない。こんな変態女が隊長だったなんて」

（ああ……みんな……）

実の兄の子種をねだる背徳すぎる姿に侮蔑の眼差しが降り注ぎ、激しい罵声が浴びせられた。人としての禁忌を望むような少女に、同情する者などいるはずがない。これまで共に闘ってきた仲間からも完全に見捨てられてしまったのだ。だが今の沙織には、それさえも快感だった。どこまでも淫らに堕ちていく自分の姿をもっと見て欲しい。そしてもっと罵声や嘲笑を浴びせられたい。

「お前に騙されたせいで俺たちはっ」「これくらいしなくちゃおさまりがつかないぜ」

目の前に二本の勃起が横から突き出されると、沙織は迷いなく両手に握り締め、飢えた犬のようにペロペロと舐め始めた。

「んっ、んふっ……ああ……オチンポがあ……くちゅ……いっばい……ああ……お詫び

の印にご奉仕致しますう♡ むふん、うふん♡」

捕まっつてから風呂にも入つていなかったのだから、強烈な腐臭が鼻を突き、舌に苦味が突き刺さる。しかしそれさえも自虐の炎に変えて、牝犬姫の身体は燃え上がる。男心をとろかす甘い啼き声を漏らしながら、根元から先端まで綺麗に舐め上げていく。舌も唇もイソギンチャクのように蠢き、濡れた粘膜を摺り合わせていく。

「うう……なんていやらしい顔だ……」

沙織から漂い出る濃厚な牝フェロモンに刺激されたのか、他の隊士たちも勃起を握つて迫つてきた。日本髪に、首筋に、乳房に、太腿に……無数の肉棒が取りつき擦り始めた。淫靡な擦過音に鼓膜をくすぐられ、牡蜜を塗りたくられ、ますます濃くなる牡の匂いに官能を高ぶらせていく沙織。これほど多くの男たちの勃起に囲まれていることが幸せでならなかった。

「んはあ……おいしい……全部、レンぶ……飲ませてくださいませね……んちゅ……沙織は殿方の子種を……あむうん……飲むのが……うい好きですのよ……ちゅばちゅばつ」

その言葉が事実であることを示すように、左右の男根を交互にしゃぶる美貌はうつとりと蕩け、白粉で白磁のように磨かれた肌は昂奮の汗を滲ませている。大勢の牡たちを独占していることが嬉しくて仕方がなかった。これほどの悦楽の世界があるとも知らず、女を捨てようとした自分が馬鹿だったとしか思えない。

「す、すごい……こんなに気持ちいいなんて……」「もう出ちまいそうだ……うううっ」

超一流の舌技で愛撫され、二人の隊士は早くも追いつめられていた。思わず腰が引ける

のを沙織のほうからくわえ込んだ。

「ああん……んちゅ……飲ませて……この淫らな遊女の沙織に……皆様の子種を……ああん……飲ませてくださいませ♥」

色っぽい声でおねだりし、沙織は男根の檻の中で白い女体をうねらせた。身体中、膣も唇も肛門も牡精を欲しがっている。仲間たちから熱い迸りをぶちまけられ、生臭い粘りで穢されたい。淫乱な女郎として軽蔑され、侮辱されたい。

勃起を搾るように頬をくぼませる。艶やかな朱唇がカリに引っかかって引き伸ばされ、鼻の下が伸ばされる。無様な奉仕顔を仲間には晒していると思うと、えも言われぬ快感が胸の奥でざわめき、太腿が兄の腰を強く抱擁して引き寄せる。膣肉も甘く痺れながら兄の男根へ絡みつき、奥へ奥へと引き込もうとする。

尻タブもえくぼを刻むほど強張って、熊方の肉棒を締めつけた。三穴からグチュグチュといやらしい音が響いて、あまりの痴態に呆気にと取られている場内に響き渡る。

肌という肌が敏感になり、擦りつけられる肉棒の大きさも硬さも温もりも、すべて感じる。もう身体中が性器になってしまったような快感に、白蛇のように裸身をくねらせる。「もつと狂わせてやるぞ、沙織」

伊織は追い込みに入った。ざらつく天井や子宮口に剛直を擦りつけ、妹の蜜壺を快楽責めに蕩けさせていく。

「あ、あ、あつっ！ 狂わせてえ……お兄様……沙織をメチャクチャにしてください♥」ズーンズーンと子宮を揺さぶられるたび、甘い屈辱感が湧き起こる。血の繋がりのせい

か肉の相性は最高で、粘膜が溶け合うのではないかと思うほど。贅肉の小さな凹凸や締めり具合に深さまで、まるで計ったかのようにぴったりで、相姦の関係となるのが運命だったのではないかとすら思えてくる。熊方の巨根の圧倒的な破壊力も凄いが、この一体感兄弟でなければ味わえないだろう。

「いいぞ、それでこそ俺の人形だ。ホラホラ、もつと子宮を蕩けさせろ」

「ハアハアツ。ああん、沙織は……お兄様のモノ……奴隷人形です……沙織のオマ○コはもう……あうんつつ……孕み頃ですのお♥ あふうん……いっぱい中出しして……子宮に子種を飲ませてえ……あふうんつつ……孕ませてくださいましい♥」

逞しい牡に中出しされ、妊娠させられる姿を思い浮かべながら、沙織は夢見るような表情で涙を一粒こぼした。それは絶望だったのか、歓喜だったのか……。

「ああ、オチンポで幸せにされちゃう……もうオチンポなしでは生きられせんわっ！」
鼓動が速くなり、男根にこね回される子壺がカアツと火照る。いつでも受胎可能なのだと沙織に訴えている。それは母性の発現に違いなかった。女の命の中心である子宮、そのさらに奥にある牝の本能の目覚めである。

「俺が命じればどんな男にも抱かれ、種付けされる。腹がへこむ暇がないほど孕み続けるのだっ！ それが人形であるお前の運命だっ！」

「あ、ああ……はい……お兄様のご命令なら……どんな男の人にも種付けされますう……はあああんつつ……一生孕み続けますわあ……ああんっ！」

感極まった牝声を上げながら、妖艶に腰をくねらせ兄との結合を深めようとする。真の

女へと生まれ変わった沙織の身体からは匂い立つような色気が溢れ出し、観衆を圧倒する。それまではやや過剰に思われた化粧や刺青さえも、ぴつたりとはまって、沙織の女の性の引き立て役となる。恥辱と絶望の果てに、沙織は究極の楽土へ辿り着いたのだ。

「お兄様……ああん……口づけを……ああ……口づけをしてくださいませ……」
「いいだろう」

一旦奉仕を中断して沙織が首を差し伸べると、兄は残酷な笑みを隠した唇を重ねてきた。
「んふ……ああ……んちゅ……お兄様あ……あふうん」

濃厚に舌を絡ませあう美兄妹。もともと顔立ちが似ているので、まるで鏡を覗き込んだようだ。それは水鏡の前でシノに愛撫されたときの妖しいときめきを沙織の中に蘇らせた。
（ああ……私……お兄様と一つに……）

こうなることがサダメだったように思えてきて、沙織は妖美な幻想に身を委ね、さらに舌粘膜を摺り合わせていく。

（私もうダメ……お兄様にされると……何も考えられないのお）

兄の熱く猛々しい男根が楔となつて沙織の肉体も精神も強力に縛っていた。兄への深い純粋な愛情までもが、沙織自身を永遠の虜囚に貶めるのだ。

「んはああんッ！ オマ○コ気持ちいいっ♥ お、お兄様……もつと動いて……あああん……奥をゴリゴリしてえ……ああん……中に……中にいっばい出してくださいませい♥」

兄の唾液を啜ったせいだろうか。急激に官能曲線が上昇し、沙織の身体はブルブルと震え始めた。あれほど嫌がっていた膣内射精を請い、乳房をブルブルと震わせ、前後の

穴で男根を締めつける。その姿は発情した牝そのものだ。

「狂いなさい。狂いながら罪の子を孕むのよ。絶対に降ろさせないから、出産も民の前でヒリ出させてやるわ。女の子が生まれたら伊織様の奴隷にするの。男の子ならまた去勢して、私の玩具にしてやるわ」

鈴玉をギリギリと手の中で転がしながら、残忍な笑みを浮かべるあさひ。

「ああああおお……っ！ 沙織はお兄様とのお……ああ、罪の子を……民の前でヒリ出しますわ……ああうん……母と子であさひ様の奴隷にしてくださいませえ！」

本当に睾丸がせり上がるような自虐の射精欲求が膀胱で荒れ狂う。行き場のない衝動が全身を乱反射しながら駆け巡り、やがて子宮に流れ込んでいく。

「あひいっ！ も、もう……きちやううっ！ ンはあぁんっ！ 中に……中に出してえ……ああ……沙織の中に……ぶちまけてくださいましっ♡」

女の性感を全開にされ、沙織は桃色の極楽を目指して駆け上がる。汗に濡れた背筋を何度も反り返らせ、全身の力を集約した括約筋の締めつけが男二人を一気に射精へと導いていく。

「おおおっ！ これはたまらん！ 出るっ、出るぞおっ！」

巨根を食いちぎられんばかりに喰い締められ、熊方は先に限界を迎えた。

ブッシャアアアアッ！ ドブドブドブドブッ！

ズンツと最奥までぶち込まれた巨根が、いなくなかように痙攣する。放尿のときを遙かに超える勢いで噴出した白濁精液が、沙織の直腸を震わせ、腹をさらに膨らませる。

「こつちもいくぞつ！ 沙織よ、孕ませてやるつ！ うおおおつ！！」

ビュクビュクビュクツ！ ドビュルルルウウツ！

獣のように咆哮し、伊織も絶頂に達する。子宮口に食い込ませた鈴口から、妹の胎内目掛けて夥しい精液を流し込んだ。

「ハイイツ！ お兄様ああつ！！ ンあああああつ！！」

膣奥で兄の肉棒の痙攣や精液の熱さを感じ取り、子宮の中で背徳の愉悅が爆発する。快感に強張る太腿が兄の腰をギュツと抱擁し、交差した爪先が反り返る。

「おおおつ！ なんというつ！」

驚くほど深く男根を引き込まれ、まるで下半身ごと呑み込まれそうな錯覚を感じる。痺れるような快感が肉棒の中心を駆け下って、輸精管を灼き、睾丸まで縮み上がらせた。伊織はもう一度吠えながら、続けざまにドピュドピュと精を放つ。

「あああああつ！ 入ってくる……お兄様の……熱いのがいっぱい♡ はあああつ！ た、たままない……もつと、もつとください……ンはああンツ！ 赤ちゃんできちやうまで……お兄様の赤ちゃん……孕むまで……沙織の中にいっぱい……いっぱい出してえつ！ 牝犬マ○コ孕ませてえつ♡」

相姦の子種をおねだりしながら、沙織は背徳の肉悦に白目を剥いて仰け反った。汗まみれの乳房が上下に跳ね、結い上げた黒髪の手がじゅらんと鳴る。子宮自体がピクピク拍動し、鈴口に密着させた子宮口から淫靡な吸飲音を響かせながら、さらに精液を吸い込んでいく。

「ひいあああ、あきやあああああああああああああああああああッ!!」

絶叫と同時に凄まじい勢いでオシッコが迸り、兄の腹にぶち当たって、飛沫を散らした。焦らしに焦らされた後の放尿は、天にも昇る気持ちよさで、沙織姫の理性を粉々に打ち砕いた。熱水が尿道を通過するだけで、射精の数十倍の快感を味わわれる。しかもそれが延々と続くのだ。調教を受けた沙織でなければ気が狂っていたかもしれない。

「沙織っ、こっちも出させてやるぞ!」

続けて伊織が妹姫の腰を強引に持ち上げ、華奢な身体を二つ折りに畳み込む。天を向いた腔孔を垂直に串刺しにするマンガリ返しのが格好だ。当然熊方の肉棒は肛門から抜け出し、鉄砲水の勢いで精液と混ざった尿水が直腸を駆け下り、開ききった菊蕾から真上に向かつてビュウウウウツと噴き出した。

「ああおとおおおおっ! そんな……おひりまでえ……ほああおああああ……こんな格好でえ……あああああッ!!」

牝獣の如き雄叫びを上げて、沙織は断末魔の痙攣を総身に走らせる。肛門粘膜が捲り返り、内臓まで見られながらの強制排泄だ。女として最も恥ずべき行為を晒し、激烈な羞恥に肌という肌が真っ赤に灼け、湯上りのように汗が噴き出した。

「すごい……あれでも感じているのか」

濃厚なオシッコの臭いが立ち込め、観衆は異様な雰囲気にも包まれていく。普通なら目を背けたくなるような醜態だが、沙織の美しさがそれを凌駕し、お漏らし姿ですら観衆を魅了するのだ。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

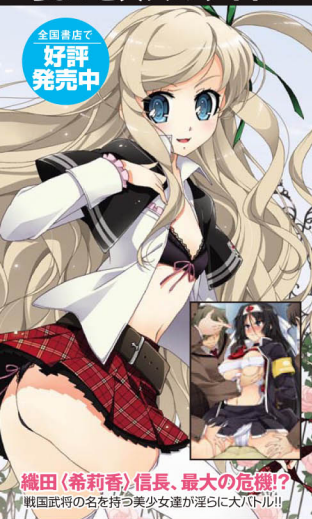
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

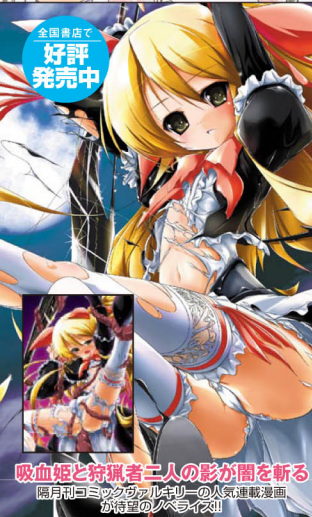
ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)



信玄、出陣!
仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 参
【小説: 斐々嘉和 / 挿絵: SAIPOCO】

全国書店で
好評
発売中

織田(希莉香)信長、最大の危機!?
戦国武将の名を持つ美少女達が渾らに大バトル!!



BLANGEL 輪になりて踊る患者の夜
【小説: 夜士郎 / 原作挿絵: 渡瀬行人】

全国書店で
好評
発売中

吸血姫と狩猟者二人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が待望のノベライズ!!



ピルグリムメイデンII 白装の騎士
【小説: 狩野景 / 挿絵: ぼち。】

2010 3月 下旬
発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!
ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!



既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガツ ①~②
- 思春期なアダム ①~②
- 胸躍! 帝都少女探偵団 赤い羅路を撃て!

- 借金お嬢クリス ①~②
- プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫

- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

